

トルコ边境における 両義的経験としてのディアスポラ

- ウズンヤイラ高地のチェルケスの事例から -

宮澤 栄 司

はじめに

- I 研究の背景とテーマ
 - II 押し付けられた「根無し」としてのディアスポラ
 - III 「根付き」の過程としてのディアスポラ
- 結 語

はじめに

本稿では、19世紀後半に祖国カフカースから中央アナトリア後背地に移住したチェルケス難民の子孫が現在どのような形で「ディアスポラ」としての性質を経験しているかについて考察を加える。従来のディアスポラ(離散民族)研究では地方生活者のディアスポラ性(diasporicity)に関して議論が不足しているという問題点がある。そこで本稿では、行為者自身が構築する「固有の意味づけ」[エマーソン, フレッツ, ショウ 1998, 235]を重視する人類学の立場から、ディアスポラ性を「根無し」と「根付き」の2側面からなる両義的経験として定義したうえで、カイセリ県プナルバシュ郡のウズンヤイラ高地で暮らすチェルケスが現在経験している転地(displacement: 土地を追われること)と再定着(resettlement)の諸相を論じることとする。第I章では、まず土地への結びつきの強弱に基づいて諸集団を階層化するために持ち出される比喩

としてのディアスポラに関して先行研究を紹介し、ついでチェルケスのアナトリアへの移住とウズンヤイラ高地のチェルケスについても概説する。第II章では、チェルケスが調査地域で競合関係にあるトルコ系集団によって、今なお土地との結びつきを否定され、「根無し」の経験を押し付けられていることについて論じる。第III章では、そうした押し付けに抗して、チェルケスが自分たちはウズンヤイラ高地の土地にしっかりと定着した集団なのだとの肯定的な「根付き」の経験を構築していることを明らかにする。

筆者は、ウズンヤイラ高地(Uzunyayla, 以降、UYと略記)のチェルケスにおける社会的記憶の諸相に関する研究の一環として、1997年9月~99年4月、2004年6~7月に現地調査を行った。長期の参与観察を行った主要調査地のウチュヨル村(Üçyol, 仮名)に加え、プナルバシュ郡の中心である町(kasaba)や40近いチェルケスの村でも、同集団の移住と定着の歴史、一族ごとの歴史、定着後の社会変化、地域におけるエスニック関係などについて、年配男性を中心に聞き取り調査をした。なお、プナルバシュ郡は、カイセリ県の中心部である大都市(2000年の人口は約60万人)からおよそ100キロメートル離れ、政治・経済・社会的に周辺化された地域であるということと、チェルケスが他の民族集団と接触

するフロンティアであるということの2点から、表題では「国境」とした。またチェルケスは、元来アディゲ人を指して用いられた他称であるけれども、本稿では地域での用法に合わせ、アディゲ人に加えてアバザ人(アブハズ人)など北西カフカースからの追放を経験したムスリム諸民族に対する総称として使用する。

I 研究の背景とテーマ

1. 植物学的比喩としてのディアスポラ

社会の多様な側面においてグローバル化が進む中、多くの人々の生活において移動が重要性を高めたのに合わせて、祖国から複数の国家に離散したディアスポラの民族に関する研究も盛んに行われるようになった。それらの研究には、離散民族を実体的に捉える社会学的アプローチと、領土化されたアイデンティティの乗り越えを模索する文芸批評的アプローチの2種類がある[赤尾2008]。人類学者のクリフォード(2002, 289, 292-293, 304)は、従来の研究の問題点として、ディアスポラ集団が均質なものとして扱われたことで、地域性、ジェンダー、階級など、その集団を分断する諸要素が見えなくなったことを挙げている。それに加えて、これまでの議論が都市生活者のハイブリッドアイデンティティやトランスナショナルな活動に偏ってきたことも問題として指摘することができるだろう。すなわち、同一の離散民族ではあっても、村落部など、地方に再定着した集団のディアスポラとしての経験は十分に論じられてこなかったのである。

本稿では、ディアスポラ性を「根無し」と「根付き」からなる過程として定義することに

より、中央アナトリア後背地に再定着したチェルケスが現在置かれている状況について議論する。ディアスポラは、その原義において「拡散すること dia」と「種を蒔くこと speiro」の2つの性質を含意する。コーエン(2001, 282-284)は、そうしたディアスポラが「園芸イメージ」であることを指摘したうえで、「種蒔き」に加えて「除草」や「移植」「取り木」「他花受粉」など多様な比喩を引き合いに出して、離散民族の類型化を試みている(注1)。だが、そうした複数モデルの援用は、ある集団を1つの型に押し込んで論じることよりも、むしろその集団が経験しているディアスポラ性の多様な側面を捉えることの助けとなるだろう。本論では、ディアスポラ性を、その原義を生かし、移民集団と土地のつながりの否定(根無し)と両者の密接な結びつきの回復(根付き)という、相反する2つの過程からなる両義的経験として設定し、これを参照概念とすることによって、UYのチェルケスにおける、転地および再定着に関連した経験の諸相を掘り起こしていくことにする。

このようなディアスポラ性は、「根」の有無に関わる「植物学的比喩」[Malkki 1997, 56]として、土地とのつながりの強弱に応じて諸集団を階層化するために生産される政治的言説の中で重要な役割を果たす。主張された「根付き」の程度が差異化のための強力なイメージを提供ようになった背景には、マルツキー(Malkki 1997, 61)が指摘しているように、国民国家においては支配的民族がその国家領土と本質的に結合しているとの考えの自然化が、政策として強く促進されることがある。トルコ共和国においても、ルイス(Lewis 1975, 39)が指摘しているように、共和国領土の正当な所有者はトルコ民族

だと主張するために、アナトリアの土壌深層にはトルコ民族の歴史が脈打っているとのイメージがたびたび利用されてきた。また、非トルコ系集団に対するトルコ民族の優越性を主張するために、「植物学的比喩」が持ち込まれることもある。例えば、古参の汎トルコ主義者レハ・オーズ・テュルクカン(Türkkân 2006, 163)は、次のようにトルコ共和国を1本のスズカケ(çınar)の巨木にたとえている。

国民国家の幹は民族の主権である……。
この国民国家を建国し、維持しているのは「トルコ民族」である。この木を養う根は、トルコ民族が蒔いた種から芽を出したものだ。木の幹に依存し、根からの養分にあずかる枝は、この国民国家に住む「その他の国民」、つまり[ムスリムの]エスニック集団を指す。葉は[ムスリム以外の]少数民族の国民である(注2)。枝にも、樹木本体から分かれた枝と、エスニック集団や宗教集団のように接木された枝がある。接がれた枝は、うまくつけば、その木の枝と同じように生きていける。……葉は落ち、枝は折れてしまうかもしれない。根と幹は生きて、新しい枝葉を作り続ける。……しかし、枝葉はトルコ民族のスズカケの木から離れたら容易に生きられない。……困難に直面し、朽ちて、他の木の養分となってしまう。

ここでテュルクカンは、トルコ共和国はトルコ民族の種から出た根の上に築かれたものだとしており、チェルケスを含む非トルコ系民族には独自の根や種を持つことを許さない。また、土地から切り離された集団は精神的支柱や社会的基盤を失い、存続できないとの意見も述べている。第Ⅱ章で見るように、日々の社会生活の

中で、このような主張が移民集団をめぐる議論において持ち出されることによって、こうした移民集団に外部から「根無し」の意味づけが押し付けられることになる。

2. チェルケスディアスポラ

チェルケスは、もともと北西カフカースに土着のムスリム諸民族であるけれども、現在では中東、アフリカ、ヨーロッパ、北アメリカを含む40カ国以上に離散している[宮澤2006]。帝政ロシアは、18世紀後半より北西カフカースにおける軍事侵攻と植民政策を進めていたが、1860年頃より、ムスリムであるチェルケスをその歴史的領土から追放して、そこにスラブ系キリスト教徒のコザック農民を入植させる政策をとった。この政策によってチェルケスの大多数が小アジア、シリア・パレスチナ地方、ルメリ、北アフリカなど、オスマン帝国各地に移住を強いられた。さらに1887～88年の露土戦争では、北カフカースからの追放が再開されるとともに、ルメリに定着したばかりのチェルケスがアジアに再び移住させられた。チェルケス難民の総数については、記録が不完全なため、現代の研究者による推定も50万人から200万人の間を揺れている[Avagyan 2004, 56-57]。「カフカース協会連合Kaf-Fed」がEUの資金援助で発行した冊子『われらチェルケス *Biz Çerkesler*』(2005, 40)によれば(注3)、その数は140万～150万人にのぼったという。

カルパト(Karpat 1985, 67)によれば、帝政ロシアがチェルケスに移住を強いた要因には、カフカースにおける安全保障、黒海における交易と航行の自由の確保などの軍事的、戦略的理由に加えて、帝政ロシア政府がスラブ的なキリス

ト教文化を広める文明化の使命を自らに課したこともあったという。また、帝政ロシアには、農奴解放で出現した土地無し農民のために大量の耕地を確保する必要があったことも指摘されている[Turgay 1991, 200; Shenfield 1999, 156]。いっぽう、オスマン政府がチェルケスの移住を受け入れた(扇動したといわれることもある)のには、アナトリアのムスリム人口を増加させることによって農業生産力や建設労働力、兵力を増強[Karpat 1985, 67; Toledano 1998, 102]する目的に加えて、キリスト教徒集団(当時、自治権拡大や独立を求めている)や部族集団との緩衝地帯の設置[Pinson 1972, 82; Karpat 2002, 666, 670], 遊牧民の定住促進[Dumont 1975, 127]の目論見もあったと考えられている。

この移住の結果、現在数百万人のチェルケスが世界中に散らばって暮らしている。カフカースでは、ロシア連邦内のカバルダ・バルカル共和国、カラチャイ・チェルケス共和国、アディゲ共和国の3カ国に約56万人のアディゲ人がいる。またグルジアから一方的に独立を宣言し、2008年8月にロシア政府の承認を取り付けたアブハジアに約9万人のアブハズ人がおり、カラチャイ・チェルケス共和国には同系のアバザ人が約3万人いる[北川ほか2006, 19]。トルコ共和国では、少数民族人口に関する公式調査結果が1965年以降公表されていないけれども、前述の『われらチェルケス』(Kaf-Fed 2005, 43)によれば、トルコ共和国の全人口(7200万人)の約7, 8%がチェルケスだという(ただし、北東カフカースからの諸集団を含む)。その他シリアに6万人、ヨルダンに4万人、イスラエルに3000人のチェルケスがいる。アフリカでは、エジプトやリビアに加えて、マダガスカルやザンジバルにもチ

ェルケスがいるという(ブルジーマムルーク朝の系統にある集団と考えられる)。さらにヨーロッパ諸国でも、トルコ共和国からの労働移民の中に数万人のチェルケスが含まれている。アメリカ合衆国にも、イスラエルに占領されたゴラン高原からの移民が1万5000人いる。また、ソ連崩壊以降カフカースへの渡航が可能となったことで、小規模ではあるが、数千人のチェルケスが父祖の地に「帰還」した。

トルコ共和国に焦点を絞れば、チェルケスは次の3地域を中心に900以上の村を築いた[Andrews 1989, 385-419]。すなわち、①イスタンブールからアナトリアへの入り口周辺(アダパザルやドゥズジェなど)、②マルマラ海沿岸地方(バルケシル周辺)、③アナトリア中程を南北に横断するベルト状地帯(サムスンからアダナにかけて)である。トルコ共和国のチェルケスの多くはアディゲ人である。その下位集団(それぞれ異なる方言を話す)としてはアブゼフ人が最多で、シャブスー人、カバルダイ人が続いている(もともと小集団であったハトコイ人は、そのほぼ全てがUYに移住した)。アブハズ人やアバザ人は少数である。その他、本稿でいうチェルケスではないが、カフカース移民の中にはダゲスタンおよびチェチェンヤなど北東カフカースからの諸集団、カラチャイ人などのトルコ系集団もいる。

近年各国のチェルケス知識人らが、自民族をディアスポラと形容するようになった[Jaimoukha 2001, 101-121; Kaf-Fed 2005, 43, 50]。人類学者や社会学者らも、チェルケスの離散民族としての諸相を論じるための分析概念としてディアスポラをししばしば用いてきた。例えば、A. カヤ(Kaya 2004, 225-226)は、トルコ共和国

のチェルケスはカフカースを今なお「ホーム」と見なし続け、故地への帰還という希求を保持し続けてきたという点でディアスポラだとしている。ブラム(Bram 1999, 219)は、それと反対に、イスラエルのチェルケスはそうした帰還の目的を放棄して、ホスト国にありながら故地に政治・経済的影響を及ぼそうとしている点でディアスポラだと考える。また、自身がヨルダン出身のチェルケスであるシャーム(Shami 2000, 180)は、カフカースで行った「帰還者」についての調査から、新しいトランスナショナルな結びつきが形成されたことで各国のチェルケスコミュニティが初めて「単一のディアスポラ民族」へと統合されたのだとの別見解を示している。

本稿では、チェルケスディアスポラに関するこうした議論で見えなくなった、より地域化されたディアスポラ性の諸相を明らかにしていく。そのために、前述のシャーム(1994, 194)が以前ヨルダン首都アンマンのチェルケス社会に関する研究で提唱した、地域ごとに異なる転地と再定着の記憶の検証という課題に立ち戻ることとする。トルコ共和国のチェルケスに関する従来の研究では、こうした個別の地域社会におけるアイデンティティ形成が十分に議論されておらず、次節に見るUYのチェルケスを含めて、都市部のエスニック活動家ではない、地方のチェルケスのディアスポラ性は周辺化されてきたという問題がある。

3. ウズンヤイラ高地のチェルケス

標高1600メートルに位置し、半径50キロメートルの広さを持つUYは、中央アナトリアにおける主要なチェルケス定住地の1つである。同地域では、チェルケスの移住が1859年に始ま

り、1861年には独立した郡が設置された[Habiçoğlu 1993, 167-169]。チェルケスの移住以前、UYはトルコ系遊牧集団のアヴシャル(トゥルクメン)が夏営地として利用していた。このアヴシャルは、18世紀初め頃よりチュクロワ地方(Çukurova, 現アダナ県周辺)の冬営地とUYの夏営地の間で移牧を行っていた集団で、1825年には3000世帯があったといふ(A.M. Kaya n.d. ⁹注⁴)。18世紀より遊牧民の定住化に取り組んでいたオスマン政府は、19世紀中頃からチュクロワ「平定」にも乗り出した。政府は、UYをチェルケスに与えることで、アヴシャルの移動を妨げ、同集団を定住させることを目論んだ。チェルケスとアヴシャルの間ではUYの専有をめぐる流血を伴う衝突が起きた。オスマン軍はアナトリアの他地域やキプロス島への追放などの方策を実施して、アヴシャルを圧迫した。その結果として、アヴシャルは1863年に政府支配を受け入れ、1865年にはザマント溪谷(ブナルバシュ郡パザルオレン区 nahiye)からタウルス山脈北部(現カイセリ県サルズ郡)にかけて、UYに隣接する地域に小村を築き、定住した。現在でもチェルケスとアヴシャル両集団の間には当時の衝突の記憶が残されている。アヴシャルはチェルケスを夏営地を奪った「最大の敵」と見なし続けており[Dumont 1975, 127], チェルケスもアヴシャルを文明からほど遠い野蛮な集団と見ている(この確執が第Ⅱ章で取り上げる事件の歴史的背景となった)。

チェルケスはUYに当初73の村を築いた。これらのうち隣接郡に属する村などを除くならば、現在ブナルバシュ郡にはチェルケスの村が56ある。その内訳はアディゲ人の村が51(カバルダイ人36村、ハトコイ人13村、アブゼフ人2村)、

アバザ人の村が4で、カラチャイトルコ人の村も1つある。カバルダイ人の村の1つは、住民の半分がチェチェン人である。これらの村には約8000人のチェルケスが住み、プナルバシュの町にもさらに約2000人のチェルケスがいる(郡全体の人口は約3万6000人で、そのうち町人口が約1万2000人)。

都市部のエスニック文化協会や互助組織などで活動するチェルケス知識人は、カフカースとの交流が可能となった1990年代以降、チェルケスはディアスポラの民族であるとの認識を強めている。彼らは、チェルケスの「根köken」が残されたカフカースと「その中に置かれている地理条件」にすぎないトルコ共和国を対比的に捉える傾向があり[例えば、Taymaz 1998, 28, 30], UYのチェルケスについても、それをチェルケス本来の場所でない集団として表象することがある。一例を挙げるならば、UY出身のアバザ人作家オズデミル・オズバイの短編小説集に寄せた緒言で[Özbay 1994, 7], アブハズ人活動家のハイリ・エルソイ(Hayri Ersoy)は、UYはチェルケスにとっての「自然な環境」ではないと述べたうえで、「種蒔きされた田畑でもっとも美しい花でさえ有害に見られる」というアバザ語の諺を引いている。このようにエスニック活動家らには、UYのチェルケスを含め、トルコ共和国のチェルケスは今なお誤った場所に置かれ続けているとの認識が共通している。

II 押し付けられた「根無し」としてのディアスポラ

本章と次章では、UYにおける、より地域化されたディアスポラ経験について検討してい

く。まず、チェルケスが、地域で競合関係にあるアヴシャルによって押し付けられている「根無し」の意味づけについて論じることにする。アヴシャルは、プナルバシュ郡の政党政治において極右の民族主義者行動党(Milliyetçi Hareket Partisi: MHP)と結びつくことによって、チェルケスへの歴史的不満を表現するとともに、地域社会における影響力を強めてきた。同郡では、複数の民族集団が接触しているうえに、1950年代以降進んだ経済的周辺化で集団間競争が過酷になっていることから、トルコ系住民の支持がトルコ民族主義を掲げる政党に集まる条件がある(注5)。プナルバシュの町はもともと1860年代にチェルケス移民を中心に築かれた町であったが、現在ではチェルケス住民が減少し、近隣の村から移住したアヴシャルが最大の集団となっている(注6)。この地域では町役場などの提供する役得がしばしば地域と党を介して流される傾向もあって、資源獲得をめぐる競争への参入が遅れたアヴシャルはMHPとの結合を次第に強めたと考えられる。

アヴシャルは1970年頃からMHPの周囲に組織化されてきたが(注7)、本調査が行われた1990年代にはトルコ共和国東部でクルディスタン労働者党(PKK)の分離主義活動が激しかったこともあり、アヴシャルとMHPとの関係は特に強固になっていた(注8)。MHPは、1977年、1994年、1999年のプナルバシュ町長(belediye başkanı)選挙で30~40%の得票率で勝利している(注9)。アヴシャルがMHPを支持した理由の1つには、党創設者アルパルスラン・テュルケシ(Alparslan Türkeş 1917-1997)の先祖が、プナルバシュ郡のユカルキヨシケルリ(Yukarı Köşkerli)村出身で、1860年代にオスマン軍によってキブ

ロスへ流刑にされたアヴシャルだった(とされる)ことがある^(注10)。実際テュルケシは最晩年にプナルバシュの町を数度訪れており、MHPの郡支部が歓迎集会を催した公園は、現在「アルパルスラン・テュルケシ公園」と呼ばれている^(注11)。近年、町の入り口にはテュルケシをトルコ世界の指導者として讃える大きな記念碑も建立された。

UYのチェルケスは、国民および国土をトルコ化しようとするトルコ共和国政府、トルコ系集団の利益を促進しながら基盤を固めるMHP、UYの土地をチェルケスから取り返すことに関心のあるアヴシャル、これら3者の思惑が、この地域では重なり合っていると感じている。チェルケスは、これらの「重要な他者」によって「根無し」性を押し付けられているとの認識を日々の暮らしの中で養うのであるが、そうした契機となる出来事の一例を次に紹介したい。

それは、1996年、プナルバシュの町から12キロメートルの距離にあるチェシメ村(Çeşme、仮名)でチェルケス男性3人が同じ村のアヴシャルに殺害された事件である^(注12)。チェシメ村は、もともとチェルケスが築いた村であるが、その近くには、チェルケスの移住以前にアヴシャルが利用したとされる小さな夏营地跡も残る。1920年代には、アレヴィークルド人が、離村した1世帯のチェルケスから家を購入し、チェシメ村に住み始めた。1970年代には、チェルケスとの不和からクルド人5世帯が全て村を離れ、それに代わってアヴシャルが村に来た。筆者が同村で調査を行った1998年秋には、チェルケス住民が約200人(50世帯)だったのに対して、アヴシャル住民は約300人(30世帯)に増えており、1994年の地方選挙ではアヴシャルが初めて村長

に選出されていた。ただし、アヴシャルは村内に耕地を持たず、男性が農繁期に合わせて農業労働者として県外に出るなど出稼ぎで収入を得ていた。これら2集団は隣接して居住しながらも、別々のモスクを利用しており、結婚式や葬儀を含めて社会的付き合いがなかった。

1996年夏、チェルケスの所有する畑でアヴシャルの男が羊の群れを放牧したことから生じた口論が原因となって、アヴシャルがチェルケス3人を散弾銃で殺害し、1人に重傷を負わせる事件が起きた。実は前日にも同じ男がチェルケスに向けて発砲する事件が起きていた。この発砲事件もプナルバシュの町に置かれた憲兵隊に通報されたのだが、MHP出身の町長の口利きで、男は銃を没収されなかった。アヴシャルを母に持つ町長(ヨズガト県からの移住者の子孫)が事件に介入した背景には、チェシメ村のアヴシャル住民の多数がMHPを支持していたことがあった(1995年の総選挙では村内の票の35%がMHPに投じられていた)。翌日、その銃が3人の犠牲者を出すことになった。3人のアヴシャルが逮捕された。葬儀には全国から4000人のチェルケスが参列し、プナルバシュの町からチェシメ村までの道路は弔問客の車が数珠つなぎとなったという。当時カイセリ県選出の国会議員(美徳党)で国務大臣だったアブドゥラー・ギュル(現トルコ共和国大統領)や県知事、軍司令官も弔問に訪れた。彼らは、アヴシャルを村から追い出すことを激しく要求するチェルケスに対して、アヴシャル住民を説得すると約束して、その騒ぎを取り鎮めた。そうした提案がアヴシャル住民に受け入れられるはずもなかった。筆者の調査当時、チェルケスの間には、いつでもトルコ人の利益を擁護する国にうまく言いくるめられて抗

議を止めてしまい、失敗したという認識が広く見られた^(注13)。

地域のチェルケスは、アヴシャルがUYの土地に目をつけていると日頃から感じており、この事件はアヴシャルがチェルケスを村から追いたて、村を乗っ取ることを目論んで起こしたものだとして解釈していた。チェルケスがUYに築いた村のうち5つでは、現在までに全住民が他の民族集団に入れ替わってしまっている^(注14)。筆者の調査によれば、これらの村が他民族の手に渡ってしまったことの原因は、チェルケス同士の不和、特に旧貴族階層出身者と奴隷子孫との対立から村内の社会関係が崩壊し、他民族を村に呼び込んでしまったことにある。だが、そうした歴史的経緯を詳しく知らない他の村出身のチェルケス(特に若い世代)は、それらの村は他民族によって暴力的に奪い取られたのだと考える傾向が強い。

また、UY周辺部の村では、土地利用をめぐるチェルケスと隣村のアヴシャルの間でしばしば小競り合いが発生する。チェルケスによれば、こうした衝突の際、アヴシャルが彼らに向かって「ロシア人の種！ここがお前たちの母国だとしてもいうのか！ロシアに帰れ！」と罵ることがよくあるという。ここにおける種という植物学的比喩の使用は、アヴシャルがチェルケスを、まさにディアスポラの本義において理解していることを示している。蒔かれた種はやがて根を張り、芽を伸ばし、幹を育て、花を咲かせ、実を結んで、新しい種を落とす。そのように共同体が再生産され、土地は領土とされて、次世代に手渡されていくのである。UYに蒔かれたチェルケスの種は、その土壌深層に民族の歴史を書き込み、集団を根から支えるはずだ。

だが、アヴシャルがチェルケスを「ロシア人の種」と呼んでいることには注目しなければならない。このようにチェルケスをその歴史的敵と同一視するアヴシャルの態度には、固有の土地から根こそぎにされた集団は生物的・文化的特性を維持することができず、支配的集団に同化されるものだとの主張が含まれているといえる。また「ロシアに帰れ！」という罵りにも、チェルケスの根ははまだ異邦に残されたままだとの意見を見ることができる。UYはアヴシャルが数世紀にわたって使用してきた歴史的領土であることから、たとえそこに異邦人の種が蒔かれたとしても、力強く根を張ることはできないといわんばかりである。アヴシャルは、チェルケスとの土地争いにおいて「ロシア人の種」という植物学的比喩を持ち出すことによって、UYのチェルケスは今なお誤った場所に置かれ続けていると申し立てるのである。

アヴシャルは、UYのチェルケスは現在も「根無し」であり続けるというイメージを補完するために、チェルケスはUYを丸裸のままにしているともしばしば口にする。例えば、筆者の親しい友人である20代半ば(調査当時)のアヴシャル男性は「チェルケスは今でもロシアに帰ることを考えているので、UYに木を植えない。どうせアヴシャルに取られてしまう木ならば植えないでおこうと考えているのだ。アヴシャルだったら、UYをほったらかしにしないのに。美しい緑の村を作るのに」と語っていた。たしかに、極寒の地で樹木もよく育たないUYの風景は荒涼としている。アヴシャルはそれを捉えて、定着の努力をしないチェルケスはUYの専有者として不適格だとするのである。先の「ロシア人の種」に関する議論と合わせるならば、

アヴシャルは比喩としての根と現実の根両方の不在を指摘することによって、UYは今なおチェルケスの領土になっていないと主張していると結論できる。そして、チェシメ村の事件が明らかにしたように、チェルケス自身の認識を重んずるならば、そうした土地からの疎外は、言説領域にとどまらず、他者によって社会的現実として押し付けられることもあるのだ。だが、そうした「根無し」性は、第Ⅲ章に見るように、実際には過去150年間にわたり再定着の努力を続けてきたUYのチェルケスが経験しているディアスポラ性の一面にすぎない。

Ⅲ 「根付き」の過程としてのディアスポラ

本章では、UYのチェルケスによる再定着の努力について考察する。地域のチェルケスは、再定住先のUYにおいて自らの民族集団を再生するとともに、土地や地域との結びつきを回復しようと努力してきた。彼らは次の2段階の作業を通じてUYを新しい「ホーム」とするのである。第1は、チェルケスの歴史の中に自分たちを行為者として置き直すことであり、第2は、UYを自民族の歴史が生産される舞台として構築することである。

まず、地域のチェルケスが自分たちを歴史を作る行為者として確立した作法をいくつか見る。第1に、彼らは先祖の移住を「追放」ではなく「ヒジュラ(イスラームの信仰を守るための、神の道への移住)として認識している。すなわち、彼らの先祖は信仰を守る目的でハリーフア(イスラーム共同体ウンマの長)の守護する国に移り住んだのであり、それは「半分ハーツジュ(マッカへのハッジ巡礼をすませた者)になったような

ものだった」という。第2に、UYのチェルケスは、彼らの先祖はカフカースの風景を想わせたUYを気に入って、そこを定住地を選んだのだと説明する。彼らの先祖は、春に草原となるUYが、故地から連れてきた数万頭の馬を放牧するのに最適だと自分で判断したのであって、アヴシャルの定住化を進めるオスマン政府の算段で同地に送り込まれたのではないという。第3に、UYからアヴシャルを追い出したのも、政府軍ではなく、馬に跨り短剣で武装した勇猛なチェルケス武将だったという。チェルケスがよく語る歴史的逸話の中には、アヴシャルが異郷からのこの奇異な侵入者を怖れ、「食するはキビ、着るは皮革、その眼は碧く、顔は黄。もうたくさんだ、我が支配者よ！連中を追放し、送り返してくれ！」(Yedikleri darı. Giydikleri deri. Gözü gö. Benzi sarı. El-aman, Padişahım, sür gitsin ger!)と(注15)、政府に嘆願したという話がある。第4に、チェルケスはアヴシャルを今なお未開の集団と見ており、たとえアヴシャルがチェルケスの移住以前UYで家畜を放牧していたとしても、その地に文明をもたらし、人間社会としての秩序を整えたのは自分たちだったと主張する。ここでは、UYを専有することの正当性が文明vs.未開の時間軸上で争われている。以上の例のように、UYのチェルケスは、移住の歴史を語る際、彼らの先祖が過去に発揮したイニシアティブを強調することによって、自分たちの集団が大帝国の犠牲者や駒とされたことを拒絶するのである。

次に、地域のチェルケスがUYを自民族の歴史を書き込む空間として構築する諸流儀を見る。第1に、チェルケスは、移住の際に集団ごと(例えば、カバルダイ人、ハトコイ人など)に固

まって集落郡を形成することのできたUYをカフカースの故地の再生だと見ている。UYのほぼ全てのチェルケスの村にはチェルケス語の村名があり、チェルケスは自分たちの間ではそれらの村名を使い続けている。そうしたチェルケス語の村名はそれぞれの村を築いた有カ一族にちなんだものであり、この地域ではほんの数世代前にチェルケス武將らが群雄割拠していたとの歴史物語を今に伝えるものだ[宮澤2007]。UYは周囲を200～1000メートルの高い山々(すなわち、標高1800～2600メートルの山々)に囲まれた窪地で隔絶感が強く、閉じられた空間の想像が容易なことから、チェルケスが同地を「小さなカフカース」と呼ぶこともある。第2に、チェルケスは、UYの住民はチェルケスだけだとしばしば誇張することがある。これは、どの村でもトルコ人やクルド人(ブルガリアからの移民、農業労働者、イマーム、教師など)が長期にわたって居住してきた事実を歪曲する。第3に、UYのチェルケスは、自分たちが故国伝来の民族文化をよく保存してきたことを大きな誇りとしている。例えば、次の証言は、気温が氷点下20度まで冷え込んだ2月の晩にウチュヨル村でウエディングパーティーが開かれた際、この村の50代の男性(現在は故人)が筆者に語ったものである。

私たちはできる限り慣習を守ろうと努めている。UYのチェルケスが世界でももっともよい形で民族の慣習を維持している。ドゥズジェやアダパザルのチェルケスは、チェルケス語を話せず、慣習も忘れてしまった。UYのダンスパーティーが原型にもっとも近く、カフカースのパーティーでさえも敵わない。そういった慣習は、海拔

1900メートルの高さにあって、寒さも厳しいこの地域の孤立性のために保存されてきたのである。[同化を狙う]国家の手もここまでは届かなかったのだ。もちろん[トルコ化を]試みなかったというのではない。ブルガリアからのトルコ系移民がこの村にも送られてきた。しかし、連中はこの気候に耐えられず、逃げ出してしまった。連中はここに到着した時「チェルケスは怠け者だ。こんなに広い土地を裸のままにしている」といって、ブルガリアから持ってきたスイカやトマトの種を蒔いた。野菜は順調に育った。しかし8月に冷たい北風が吹いて、全ての作物が霜でだめになってしまった。連中は「こんな所には住めない」といって、温暖なトルコ西部へと再び移住していった。

この男性は、UYの標高を300メートルも上乗せし、同地域の隔絶性を誇張したうえで、UYへの「根付き」に失敗した別の移民集団を持ち出すことによって、チェルケスは、幾世代も多大な苦勞をすることを通してUYを自分の土地としてきたのだとの主張を展開した。すなわち、彼は、同地域の周辺性を逆手に取ることによって、UYのチェルケスはトルコ共和国による同化政策に抗して民族の慣習を守り、また厳しい気候に抗してこの地にしっかり踏みとどまることができたのだと、カフケの語りを紡いだといえる(注16)。以上の諸例に見られるように、UYのチェルケスは、故地との連続性を保ったチェルケスの国を多様な作法で象徴的に構築することによって、同高地が自民族の領土であるとの主張を正当化するのである。彼らは自分たちをチェルケスの中で周辺化された集団 すなわ

ち、トルコ辺境の小さなディアスポラ集団と見ておらず、その本流にある中心的集団としての強い自負を持っているといえる。

さらにUYのチェルケスは、先祖が移住した歴史を、祖国追放や民族離散、社会的混乱の悲劇としてではなく、彼らが今ある場所への移住、社会関係の生み出しと回復の物語として語ることも多い。次の証言は、移住以前のカフカースに最大級の村を持ち、オスマン軍のパシャも輩出した名門一族出身の70代の男性(現在は故人)がブナルバシュの町で筆者に語ったものである(注17)。

私たちの一族は最初スィヴァス県のコルドゥズエリ郡に村を築いた。そこから一部がカンガル郡に移って別の村を築いた。自分の祖父はブナルバシュ郡に来て、ここでまた別の村を築いた。一族の奴隷がヤヒヤル郡に移っていった。その村は2地区に分かれているが、そのうち1つは私たちの一族にちなんで呼ばれている。一族のまた別の男もサルズ郡に村を築いた。その男はその後シリアに移動し、そこでも村を築いた。

この話者は、自分の一族が移住の道中で小集団に分かれ、そのそれぞれが各地で村を築いた歴史(これらの村の全てが話者の一族にちなんで名付けられた)を語っている。カバルダイ語では、種を意味する「ジュラ жыртә」という言葉が(注18)、村や居住地、そしてそこに一緒に住む集団(しばしば氏族)も指す。そうしたチェルケス独自の文化的想像力を考慮するならば、この古老は、ディアスポラの経験を、広く蒔かれた種が散り失せてしまうこと(根無し)としてではなく、その種がそれぞれ蒔かれた場所にしっかり根を降

ろすこと(根付き)として言葉にしたといえる。

また、次の証言はウチュヨル村の50代の男性が筆者に語った再会の物語である。

私たちの一族は、移住前のカフカースでもウチュヨル村の他の一族と同じ村に住んでいた。だが、私たちの先祖は陸路で移住したので、船に乗った他の一族から離れてしまった。私たちの一族は6家族からなり、奴隷家族もあった。奴隷の父は年老い病んでいたもので、私たちの先祖はその妻と娘だけを連れて移住した。一族は最初アルダハン[現グルジアとの国境付近]に定着した。そこで奴隷の娘を売った。娘を売られた母親が逆上して、一族の家や納屋に火をつけ焼いてしまった。そのために一族のうち3家族がトカト県のニクサル郡に再び移住しなければならなくなった。私の曾々祖父はそこで3人の息子をもうけた。曾々祖父の家族は、別の2家族を残して、そこからこのウチュヨル村に来た。その息子の1人は、ウチュヨル村の別の一族の娘を嫁に取った。

この語り手は、先祖が途中困難な目に遭いながらもウチュヨル村に辿り着き、同郷者の本集団に合流できたこと、そして結婚を通して故地での社会的絆を再生したことを述べている。つまりこの話者は、移住を、父祖の地から根こそぎにされた悲劇としてではなく、再定住先において社会を構築しなおす物語として語ったのである。本章のまとめとして、UYのチェルケス自身にとって、ディアスポラの経験は、第1に、新しい土地に「ホーム」を再び創出する「根付き」の過程だといえる。

結 語

本稿では、ディアスポラ性を「根無し」と「根付き」の2面からなる両義的経験として設定することによって、中央アナトリア後背地に先祖が難民として移住したチェルケスの現在における転地(土地を追われること)ならびに再定着の主観的経験について考察した。UYのチェルケスは、エスニック知識人やトルコ系集団によって今なお「根無し」として扱われることがある。しかし、彼らは、他者によるそうした否定的意味づけの押し付けに抗して、自分たちはUYの土地にしっかりと「根付いた」集団であるとの意味や経験を自分自身のために構築しているのである。UYのチェルケスは、固有の領土から追い立てられた移民集団が再定住先に新しく根を降ろした社会的過程を検証するのに適した事例を提供する。人類学者ラヴェルが指摘しているように、移住や流刑が安定した地域性(locality)を「根こそぎuproot」にしてしまうことがあっても、転地の困難は必ずしも社会的混乱につながるわけではないといえる。なぜなら、本事例が明らかにしたように、その移動の経験からも肯定的な意味が引き出されたり、新しい場所への定着の記憶や帰属の感覚によって離地の記憶が相殺されたりするからである[Lovell 1998, 5]

本稿では、「根付き」の経験に関する議論を、その語りとしての側面に限定せざるを得なかった。カイセリ県でも有数の農業地帯であるUYでは、農作業(麦栽培および家畜飼育)を通じた土地との結びつきの回復も重要であり、今後、そうした「根付き」の実践的側面の検討が必要

である。しかし、UYのチェルケスは、誰もが等しく土地と結びついているのではない。というのは、第1に、この地域では農家として自立できる裕福な者は少ないからである。貧しい家族は、所有するわずかの土地をトラクター持ちに貸して得た代金(1ドニウム dönüm, すなわち1000平方メートル当たり32キログラムの穀物が標準)、少数の家畜から得られる乳製品、そして都市で働く家族からの仕送りに依存することによって村での暮らしをなんとか維持しているのだ(注19)。第2に、第Ⅲ章末で紹介した2つの証言に示唆されたように、この地域のチェルケス(特にカバルダイ人とアバザ人)の間には旧貴族階層出身者と奴隷子孫の間の身分意識が強く残されているからである。これら2つの身分集団はそれぞれ「根持ち köklü」「根無し köksüz」と言及されており、奴隷子孫には「根」のあることが否定されている。そして、第3に、村レベルでは、もともとその村に定着した「土地の者 yerli」と後に他の村から再移住してきた「他所者」(ヘヘス хәхәс)が区別され(注20)、「他所者」に対する「土地の者」の精神的、社会的優越性がしばしば主張されているからである。このように、同じディアスポラ集団の一員ではあっても、誰もが同じ「根付き」の経験を共有できるわけではないのだ。ディアスポラが土地とのつながりの程度にしたがって集団間に差異を生成する働きを持った概念(植物学的比喻)だとするならば、UYのチェルケスの間におけるディアスポラ性の経験は、経済格差、身分の違い、出身地の違いなど、交差する複数の軸にそって複雑に分断されているのである。この問題については、稿を改めて論じたい。

- (注1) コーエン(2001, 282-283)は、スターリン時代に行われたカフカース地方のロシア化政策を「雑草の生育を抑えるために安全な中性の物質を散布すること」にたとえている。
- (注2) (筆者注)トルコ共和国では、1923年のローザンヌ平和条約に基づいて、キリスト教徒やユダヤ教徒など非ムスリム人口に対してのみ「少数民族 azınlık」としての公式ステータスが認められている。
- (注3) カフカース協会連合(Kafkas Dernekleri Federasyonu: Kaf-Fed)は、トルコ最大のチェルケス組織で、全国57(2008年1月現在)の団体を束ねる。
- (注4) この集団は4万頭の乳牛、4万匹の羊、9000頭のラクダ、3000匹の山羊を保有したという[A.M. Kaya n.d.]
- (注5) 中央アナトリアにおけるMHP支持に関する分析は、Ağaoğluları(1987, 202-203)を参照せよ。
- (注6) 同町の人口内訳は、推定で、①アヴシャル40%、②アレヴィークルド人30%(隣接するサルズ郡から移住)、③チェルケス20%、そして④カルスからのトルコ系移民(1877~78年の露土戦争で難民化したカラバク)と⑤ブルガリアからのトルコ系移民(1930~50年代に人口交換で移住)が合計10%である。また、ブナルバシュ郡にある合計118の村には、チェルケスの村56、アヴシャルの村55、アレヴィークルド人の村1、トゥルクメンの村1が含まれる。残りはカルス移民もしくはブルガリア移民の村であるが、両集団は他の多くの村にも分散して居住している。ここに挙げた村の数は、それぞれの村における住民構成の現状を必ずしも正確に反映するものではない。
- (注7) 1969年の国政選挙におけるMHPの得票率は、全国およびカイセリ県全体でいずれも3.0%と低かったのに対して、ブナルバシュの町では13.8%と高かった。国政選挙における同町でのMHP支持は、1977年に22.5%(全国6.4%、全県13.2%)、1995年に25.3%(全国8.2%、全県17.8%)と強まった。1970年代後半右翼と左翼の対立でトルコが政治的に2分された時代には、同町のMHP党員が「クルド人に死を! チェルケスに弾圧を!」(Kürtlere ölüm, Çerkezlere zulüm)をスローガンに掲げたという。
- (注8) 興味深いことに、ブナルバシュ郡に属するパザルオレン区(nahiye)の町(kasaba)と同郡に隣接す

るサルズ郡の町は、いずれも住民のほとんどがアヴシャルであるにもかかわらず、それぞれの首長選においてMHP公認候補が勝利したことが一度もない。パザルオレンの町の住民はほぼアヴシャルであり、ブルガリアからのトルコ系移民がそこにわずかに混じっている。サルズ郡には、かつてアレヴィークルド人が多数いたけれども、その多くが現在までに英国に亡命移住してしまい、地域における影響力を失っている。ブナルバシュの町でアヴシャルとMHPの結びつきが強いには、他のエスニックグループとの競合関係が大きな要因となっていると考えることができる。

- (注9) ただし2004年の町長選では、MHPの郡支部が候補選んで合意できなかったことから、無所属で出馬した元MHP党員が41.9%の得票率で勝利した。ここから明らかなのは、地方における政党政治の現実には、地域社会におけるエスニック関係からだけでは説明できないパワーゲームだということである。2009年3月の選挙については、残念ながら結果を入手できなかった。
- (注10) テュルケシ(Türkeş)の著作『9つの光』(1978, 5)の著者紹介には、「テュルケシの先祖(ataları)はカイセリ県出身である。曾祖父(büyük dedesi)のアリフ・アガは、カイセリ県ブナルバシュ郡のユカルキョシケルリ村から移住して、キプロスに定着した」とある。
- (注11) 筆者も、カイセリのエルジエス大学に勤務(1994~96年)していた1996年7月に、ブナルバシュでの歓迎集会を1度観察している。テュルケシ本人は、その集会における演説の中で、自分の先祖がブナルバシュ出身とされることについて言及しなかった。
- (注12) この事件の概要についての以下の記述は、被害者の親戚を含め、チェシメ村のチェルケス住民が筆者に語ったことに依拠するところが大きく一面的である。なお、筆者は、この事件について、同様の他の事件と合わせ、博士論文でより詳しく論じた[Miyazawa 2004, 第2章]
- (注13) 1999年の選挙ではMHPの町長が再選された。MHPは国会でも第2党となり、ピュレント・エジェヴィットの民主左派党と連立内閣を組織した。MHP党首のデヴレット・パフチェリは副首相となった。
- (注14) それらの村における現在の住民は、2村でアヴシャル、2村でクルド人、1村でトゥルクメンとなっ

- ている。
- (注15) göはgök(青い)の古い方言。
- (注16) UYのチェルケスは、「UYの材木や穀物は、寒冷のためゆっくり育つので、身が締まっていて高品質である」「UYの子羊は野性の香草を食べて育つので、トルコで最上等のラム肉になる」などと、UYの厳しい気候を逆手に取ることによって、カブげのための語りを紡いでいた。
- (注17) カバルダ・バルカル共和国の歴史家ドゥマン(Думэн 1994, 146)によれば、1862年にこの一族の村には105世帯、1109人が住んでいたという。
- (注18) 本稿では、チェルケス語(カバルダイ語)の単語にはキリル文字を用い、それらをトルコ語の単語と区別することにする。ただし、UYのチェルケス自身がキリル文字を使用しているわけではない。
- (注19) ウチュヨル村はUYのもっとも豊かな村の1つであるが、そこでさえ69世帯に対し19台のトラクターがあるにすぎない。そのうち専有されたものはわずか8台であり、残り11台は兄弟や親戚などの間で共同利用されている。トラクターを使用できるのは合計で32世帯である。筆者の調査期間中、トラクターを持たない2世帯が村で生計を立てることができず、150キロメートル離れたカイセリの町に移住した。ブナルバシユ郡の経済的脆弱性については、Taymaz(1996)が詳しい。
- (注20) Amjad Jaimoukhaによると、хэхэс(へへス)は、「他所」を指す接辞“х”と「ある場所に座る/滞在する」を意味する動詞“хэсын”の2要素からなる言葉で、「我々の村や町で暮らす他所者」と「他所で暮らす同郷者」の両方を指して用いられる場合があるという。特にカフカースのチェルケスは、хэхэсを、故地外のディアスポラに存在するチェルケスに対しても用いるとのことだ(私信)。筆者の観察によれば、UYのチェルケスは、хэхэсを強く否定的な意味合いを込めて用いることが普通である。

【文献リスト】

日本語文献

- 赤尾光春 2008. 「ディアスポラの両義性について」 武者小路公秀監修、浜邦彦・早瀬貴紀編『ディアスポラと社会変容：アジア系・アフリカ系移住者と文化共

- 生の課題』国際書院 205-207.
- 北川誠一ほか(編)2006. 『カフカースを知るための60章』明石書店.
- ジェームズ・クリフォード 2002. 『ルーツ：20世紀後期の旅と翻訳』月曜社.
- 宮澤栄司 2006. 「知られざる悲劇の歴史と記憶のはざまで チェルケス人の大追放」 木村崇他編『2つの文明が交差する境界』彩流社 81-105.
2007. 「ウズンヤイラ高原のチェルケスにおける故郷の風景の再構築 村名と名付けにみる『記憶の風景』と『記憶としての風景』」『オリエンタ』50(1)(9月)128-155.
- ロバート・M・エマーソン、レイチェル・I・フレッツ、リンダ・L・ショウ 1998. 『方法としてのフィールドノート：現地取材から物語作成まで』新曜社.
- ロビン・コーエン 2001. 『グローバル・ディアスポラ』明石書店.

外国語文献

- Ağaoğluları, Mehmet Ali 1987. “The Ultrationalist Right.” In *Turkey in Transition: New Perspectives*. eds. Irvin C. Schick and Ertuğrul Ahmet Tonak, 177-217. Oxford: Oxford University Press.
- Andrews, Peter Alford ed. 1989. *Ethnic Groups in the Republic of Turkey*. Wiesbaden: Dr. Ludwig Reichert Verlag.
- Avagyan, Arsen 2004. *Osmanlı İmpetatorluğu ve Kemalist Türkiye'nin Devlet-İktidar Sisteminde Çerkesler: XIX. Yüzyilin İlk Yarısından XX. Yüzyilin İlk Çeyreğine*. Istanbul: Belge Yayınları.
- Bram, Chen 1999. “Circassian Reimmigration to the Caucasus.” In *Roots and Routes: Ethnicity and Migration in Global Perspective*. ed. Shalva Weil, 205-222. Jerusalem: the Hebrew University, the Magnes Press.
- Думэн, Хьэсэн М. 1994. *История и этнография чеченского народа*. М.: Наука.
- Dumont, Paul 1975. “La Pacification du Sud-est Anatolien en 1865.” *Turcica* 5: 108-130.
- Habiçoğlu, Bedri 1993. *Kafkasya'dan Anadolu'ya Göçler*. Istanbul: Nart Yayıncılık.
- Jaimoukha, Amjad 2001. *The Circassians: A Handbook*. New York: Palgrave.

- Kafkas Dernekleri Federasyonu(Kaf-Fed)2005. *Biz Çerkesler*. Ankara: Kafkas Dernekleri Federasyonu.
- Karpat, Kemal H. 1985. *Ottoman Population 1830-1914: Demographic and Social Characteristics*. Madison: The University of Wisconsin Press.
2002. *Studies on Ottoman Social and Political History: Selected Article and Essays*. Leiden: Brill.
- Kaya, Adnan Menderes n.d. *Avşar Türkmenleri*. http://emirusagi38.sitemynet.com/kayseri_avsarlari.htm (2006年6月2日閲覧)
- Kaya, Ayhan 2004. "Political Participation Strategies of the Circassian Diaspora in Turkey." *Mediterranean Politics* 9(2)(Summer) 221-239.
- Lewis, Bernard 1975. *History: Remembered, Recovered, Invented*. New Jersey: Princeton University Press.
- Lovell, Nadia 1998. "Introduction: Belonging in Need of Emplacement?" In *Locality and Belonging*. ed. N. Lovell, 2-22. London: Routledge.
- Malkki, Liisa 1997. "National Geographic: The Rooting of Peoples and the Territorialization of National Identity among Scholars and Refugees." In *Culture, Power, Place: Explorations in Critical Anthropology*. eds. Akhil Gupta and James Ferguson, 52-74. Durham and London: Duke University Press.
- Miyazawa, Eiji 2004. "Memory Politics: Circassians of Uzunyayla, Turkey." Ph.D. thesis, the School of Oriental and African Studies, University of London.
- Özbay, Özdemir 1994. *Anadolu'da Kafdağı Oyküleri*. Istanbul: Nart Yayıncılık.
- Pinson, Marc 1972. "Ottoman Colonization of the Circassians in Rumeli after the Crimean War." *Études Balkaniques* 3: 71-85.
- Shami, Seteney 1994. "Displacement, Historical Memory, and Identity: the Circassians in Jordan." In *Population, Displacement, and Resettlement: Development and Conflict in the Middle East*. ed. S. Shami, 189-201. New York: Center for Migration Studies.
2000. "Prehistories of Globalization: Circassian Identity in Motion." *Public Culture* 12(1)(Winter) 177-204.
- Shenfield, Stephen D. 1999. "The Circassians: A Forgotten Genocide?" In *The Massacre in History*. eds. Mark Levene and Penny Roberts, 149-162. New York: Berghahn Books.
- Taymaz, Erol 1996. "Düzce ve Pınarbaşı'nda Sosyo-ekonomik Değişme." In *Türkiye Çerkeslerinde Sosyo-kültürel Değişme*. Ankara: Kaf Der Yayınları.
1998. "Diaspora ve Kimlik." *Nart* 7(June) 28-30.
- Toledano, Ehud R. 1998. *Slavery and Abolition in the Ottoman Middle East*. Seattle & London: University of Washington Press.
- Turgay, A. Üner 1991. "Circassian Immigration into the Ottoman Empire, 1856-78." In *Islamic Studies Presented to Charles J. Adams*. eds. Wael B. Hallaq and Donald P. Little, 193-217. Leiden: E. J. Brill.
- Türkeş, Alparslan 1978. *9 Işık*. Kayseri: Ül-Kor Kitap Evi.
- Türkkan, Reha Oğuz 2006. *Yükselen Milliyetçilik*. Istanbul: Pozitif Yayınları.

(みやざわ えいじ / 上智大学アジア文化研究所客員所員)